

ワークショップ：文学の移動／移動の文学 マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む ～多面体としての文学～

奥村文音

本ワークショップは、2022年6月25日（土）、管理棟中会議室にて、対面とZoomのハイフレックス形式で開催された。前年の秋より、ラテンアメリカ文学の久野量一先生の呼びかけで集まった本学および他大学の学生・研究者が、週一度の読書会でマリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読み進め、内容を論じあってきた。ワークショップはその総括として行われたもので、『ケルト人の夢』の訳者である野谷文昭先生と、作家の星野智之氏の2名を特別ゲストとして迎え、『ケルト人の夢』を様々な角度から斬ってみるという試みであった。

『ケルト人の夢』は、アイルランド独立運動を率いたことで知られるロジャー・ケイスメントの生涯を描いた小説である。外交官時代は植民地支配と戦い、やがては祖国アイルランドの独立運動に関わり処刑されるという波乱に満ちたロジャーの生涯が、所々フィクションの要素を交えつつリョサの手によって再構成され、魅力的な物語として展開される。ロジャーの同性愛者としての自己嫌悪や、同胞たちから向けられてしまう不信感、肝心な部分での詰め甘さなどといった、人間としてのロジャーの葛藤もかいま見られ、それが単なる英雄譚とは一味違った印象を与える。

ワークショップは3部構成で、第1部ではラテンアメリカ文学専門の3名、第2部はラテンアメリカ以外の地域を専門とする3名、第3部は文学以外の分野でラテンアメリカを専攻する2名が報告を行った。

第1部は上玉利氏の発表からスタートした。上玉利氏は『ケルト人の夢』の構造的特徴である対位法について、同小説と共通点の多い『楽園への道』と比較しつつ論じた。対位法を用いることで、様々なエピソードの「持ち越し効果」がはたらき、それが読者の読みをおのずと規定していくという。両小説に共通する、多くの矛盾を抱えるがゆえに失敗が運命づけられた主人公像を描き出す上でも、対位法がうまく作用していると上玉利氏は述べる。

2番目の栗原氏は、主人公として「書かれる」存在でありながら、同時に自らも日記や報告の「書き手」でもあるという、ロジャーの特異な立ち位置に注目する。とくに、ロジャーが自らの性生活を仔細に書きつけた日記「ブラックダイアリー」においては、ロジャー自身が小説内にもう一つのフィクションを作り出していると栗原氏は述べる。一方でロジャーは、フィクションとしてリョサの手で「書かれる」ことによって、それまで「声を持たない側」であった民族的・性的マイノリティとしての自分を語る権利を得たのだと

いう。

続く藤井氏は、1960-70年代にリョサが志向した「全体小説」の観点から、『ケルト人の夢』における虚構と現実の問題を論じた。『ケルト人の夢』はその壮大なスケールにおいては「全体小説」的ともいえるが、歴史的現実に基づく時間構造や、様々な内面的矛盾をもちあわせた実在感のある主人公像といった点で、「全体小説」を志向した時代の作品と異なっているという。『ケルト人の夢』は一見、現実に対するフィクションの敗北が描かれているようだが、一方で他作品の自己引用などもみられ、それによって自立した虚構世界との回路が保たれていると氏は指摘する。

第2部はラテンアメリカ文学の「外から」のアプローチということで、はじめにヒンディー語専攻の村上氏が発表を行った。村上氏は、ロジャーと同世代の作家キップリングを取り上げ、植民地主義に対する二人のまなざしの違いを指摘した。支配者側と被支配者側の中間的立場におかれている点で両者は似た境遇にあるが、のち完全に被支配者側に立ったロジャーに対し、キップリングは植民体制自体には疑問を持たなかったとされる。こうしたことが、今日彼らが対照的な評価を受けていることにつながっているという。

次に、スペイン思想をご専門とする松本健氏が登壇した。松本氏は、読書会でも度々議論的となった「夢」の概念について、スペイン思想に特徴的な「十全な私の実現」という視点から考察を行った。ロジャーの「夢」は、実現不可能なものを「熱望」しつづけるというサバテールの幸福に通ずる部分があるという。そしてロジャーの場合、狂信的といえるまでにナショナリズムに酔い、非理性的要素を流入させたことで、その「夢」が結果的に自己の身を亡ぼすようなものに変貌してしまったのではないかとのことであった。

続いてロシア文学を専攻する筆者が発表し、リョサおよびラテンアメリカ文学とソ連・ロシアの関わりを紹介した。リョサとソ連作家同盟間の確執や、ラテンアメリカ文学の翻訳と検閲の問題など、振り返ってみると、ロシアのさらなるイメージダウンにつながりそうな話題ばかりになってしまったのだが、普段どっぷり漬かっているロシアを、何もかも真反対のような（それでいて妙に似ているような？）ラテンアメリカを通して見てみる試みということで、個人的には非常に面白い経験をさせていただいた。

第3部では、まずラテンアメリカ映画をご専門とする新谷氏が、視覚芸術におけるロジャー・ケイスメント表象を、豊富な映像を交えつつ紹介した。ロジャーの死後、彼の人生を題材とした映像作品製作の試みが各国であったが、いずれも最大の争点となったのは『ブラックダイアリー』をどのように扱うかという点であった。ロジャーの多面的な人物像は人々を魅了し、様々な視覚表現を生んだが、近年では例えばロジャーを亡霊として登場させるなど、想像的な演出を加えることで、現代社会への問題提起を行うような試みも見られるという。

最後の登壇者となった近藤氏は、文化人類学の分野でラテンアメリカをフィールドとされているが、今回は『ケルト人の夢』の主人公としてのロジャーと、実際のロジャー・ケイスメントのアマゾン像を比較し、両者間のズレを提示した。小説内のロジャーにとって、逃亡という現実的な抵抗手段は思考の埒外にあり、考え得るのは武装蜂起という“夢”のみであった。対して実在したロジャーは、先住民の逃亡の事例をたびたび記録しており、武装蜂起以外の手段で抵抗を続ける彼らの強さをみとめていたようである。

ごくかいつまんだ紹介となってしまったが、専門分野も多種多様な計8名の登壇者が集い、まさに「多面体としての文学」のテーマにふさわしい賑やかな場となった。またここでは紹介しきれなかったが、ゲストのお二人はそれぞれの発表に対し、様々な角度からコメントをくださった。実際にテキストを翻訳された野谷先生は、作家リョサの内面に迫るような視点をいくつも提示してくださり、「実はリョサは好きではない」とワークショップ冒頭に言い放ち、会場の笑いを誘った星野氏によるコメントも、構造の達人としてのリョサの“いやらしいまでの”巧みさを再認識させるものであった。『ケルト人の夢』では、主人公ロジャーの夢や回想が物語のカギとなっている部分が多々あったのだが、そんなロジャーにも微睡む隙を与えない、刺激のかつ密度の濃いワークショップとなったのではないだろうか。読書会・ワークショップをオーガナイズしてくださった久野先生に、この場をお借りして改めてお礼申し上げたい。

ワークショップ：文学の移動 / 移動の文学

マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む
～多面体としての文学～

日時：2022年6月25日（土）14:00～17:00

場所：東京外国語大学管理棟中会議室、オンライン（ウェビナー）

特別ゲスト：

野谷文昭（東京大学名誉教授）

星野智幸（作家）

講師：

近藤宏（神奈川大学人間科学部准教授）

司会：

久野量一（東京外国語大学）

発話者：

上玉利茉佑（東京外国語大学大学院）

栗原佑紀子（東京大学大学院）

藤井健太朗（東京大学大学院）

松本健（東京外国語大学修士修了生）

村上梨緒（東京外国語大学言語文化学部）

奥村文音（東京外国語大学大学院）

新谷和輝（東京外国語大学大学院）

ワークショップ：文学の移動／移動の文学

マリオ・バルガス＝リョサ『ケルト人の夢』を読む ～多面体としての文学～

このワークショップは、『ケルト人の夢』読書会の成果を共有するために開かれるものです。
大学院生や学部生の発表と、それに対するゲストの先生方のリプライを中心に構成されます。

特別ゲスト：

野谷文昭(東京大学名誉教授)

星野智幸(作家)

講師：

近藤宏(神奈川大学人間科学部准教授)

司会：久野量一(東京外国語大学)

発話者：

上玉利茉佑(東京外国語大学大学院)

栗原佑紀子(東京大学大学院)

藤井健太郎(東京大学大学院)

松本健(東京外国語大学修士修了生)

村上梨緒(東京外国語大学言語文化学部)

奥村文音(東京外国語大学大学院)

新谷和輝(東京外国語大学大学院)

日時：2022年6月25日(土曜日)

時間：午後2時から5時

場所：東京外国語大学管理棟中会議室

参加方法：対面は学内者優先で事前登録制

オンライン(ウェビナー)参加はQRコード(上)より登録

※対面希望の場合、QRコード(下)で参加登録をお願いします。

感染対策のため定員20名。学内者を優先する場合があります。

主催：総合文化研究所 連絡先：rkuno@tufs.ac.jp

